



「作詞」の ポイントとヒント

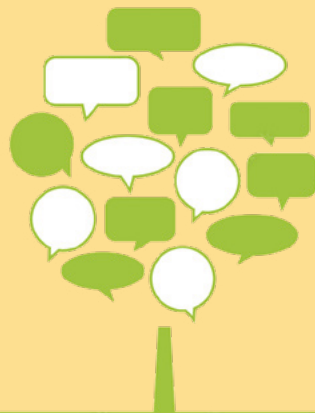
オリジナル曲を作るには、歌詞、メロディ、コード進行、各パートのフレーズなど、様々なことを考えなければなりません。作る順番は特に決まっていますが、他の音楽的な知識が必要そうなものから比べれば、作詞は誰にでも取りかかりやすいのではないのでしょうか。しかし、歌詞はつらつらと思ったことを書いていけば良いというものではありません。そうです、作詞は自由なようで全然自由ではないのです。

もちろん、初めの頃は何も気にせず「まず作ってみる」ことが大切ですが、実際に楽曲として仕上げていくためには様々なことを気にかけておく必要があります。それは、どうやって歌詞を書いたら良いのかと悩んでいる人にとっても、既に何曲か書いたという経験者にとっても大きなヒントとなるでしょう。

本題の前に・・・

歌詞と音楽の関係を知ろう

ポピュラーミュージックは、聴いたり演奏したりするだけではなく、自分たちで楽曲を作ってしまうことも大きな楽しさの1つです。軽音楽部では誰かに聴いてもらうことが最終的な目標でもあります。言いたいことや思ったことを音楽に乗せて言葉で表現するもの、それが「歌詞」なのです。音楽と歌詞の関係性をまず知っておきましょう。



歌詞とメロディの関係

歌詞という漢字には「詞」という字が使われています。「詩」ではありません。かつて私小説的な歌詞が流行した時代には、あえて「歌詩」「作詩」としていたアーティストもいましたが、本来歌詞は詩（ポエム）ではなく、詞（しらべ）です。すなわち、言葉に音楽的な抑揚や響きがついて初めて歌詞になるわけです。もちろん、歌詞は自分の思った好きなことを書いて構わないのですが、詩、作文、日記、ブログ、ツイートといったものとは大きく違います。例えば、どんなに良い「詩」であっても、それがそのまま「良い歌詞」になるとは限りません。音楽の一部としてメロディや演奏と合わさった時に最大の効果がある。それが「歌詞」なのです。

そういった意味では歌詞の言葉選びは重要です。言い回しや文字数の帳尻

合わせ、言葉のイントネーションやアクセント、息継ぎとの関係、セクションの流れ、タイトルやサビにふさわしいキャッチーなワードなど、考慮しなくてはいけないことはたくさんあります。さらに、上級者になれば言葉の意味だけではなく「響き」に重きをおく場合もあります。実際にメロディに乗せた時の「子音」や「母音」の響き方を重視して、言葉を「音」として捉えて選んでいくということです。

普段聴いている楽曲を、単なる言葉の羅列ではなくメロディとの兼ね合いや「音」を気にして聴いてみましょう。

歌詞と伴奏の関係

歌詞は、歌詞だけ単独で成り立っているわけではありません。メロディ、コード進行、各楽器パートのリズムやフレーズ、全体的な世界観などとの関

係が重要です。

ものすごく大げさに言えば、悲しい歌詞に悲しげな響きのコードや演奏があると、その歌詞の悲しさが増して聴こえ、より歌詞の伝えたいことや世界感を膨らませることが出来ます。逆のパターンとして、例えばドラマや映画のワンシーンで主人公が悲しみに暮れるシーンのバックに切ない音楽が流れているとします。その歌詞が「今日も快晴で元気いっぱい！」といった感じだとしたらどうでしょう。どんなに肯定的にみてもそのシーンには合いません。

歌詞と演奏のイメージがかけ離れていると楽曲としてのまとまりに欠けてしまいます。各楽器のフレーズだけではなく、音色や音量なども歌詞の世界観を左右します。優れた楽曲は、歌詞とメロディとコード進行、そして全体のアレンジやサウンドメイク…、それぞれがお互いを活かすような作りに



▲作詞を始める前に、まず歌詞はどんなものなのかを理解しておこう

なっています。全体の関係性を考えながら作詞することがポイントです。

歌詞を書くタイミング

作詞の順番として、まず先に歌詞を書いてしまう「詞先」と、ある程度メロディや楽曲の形ができてから歌詞を乗せる「曲先」があります。どちらが正しいというわけでもありませんし、慣れてくれば歌詞とメロディ、あ

るいはコード進行なども同時に思い浮かぶこともあります。

先に歌詞を書いてテキトーに抑揚をつけて読んでいくと、「ハまる」メロディに出会うこともあります。逆に、思いついたメロディを口ずさんでいると「ハまる」言葉が見つかることもあります。どちらにせよ、作詞には内容だけではなく、メロディや楽曲に合わせていく作業が生まれます。また、1コーラスができて先が続かない、サビはできたけどAメロが出てこない…など、生

みの苦しみもついて回るでしょう。

普段から気になった出来事や思いついたワードをメモっておく習慣をつけ、ストックしておくくと便利です。そして、共同作業できることもバンドの強みでもあります。メンバー間でアイデアを出しながら歌詞を完成させていくことも有効です。

「テーマ」を決めよう

歌詞の内容は自由です。また、その作り方にも決まりはありません。しかし、人に伝えることを前提にすれば、ストーリー性や全体的な内容に共感性が必要です。作詞に慣れていない場合は、マクロからミクロへ、アウトラインを決めてからディテールを作っていく方が作りやすいと思います。まずは書きたいことの「テーマ」を決めていきましょう。



大枠の「テーマ」から決めよう

歌詞は、楽曲の良し悪しを測られてしまうこともある重要なピースです。本格的な歌詞を書くための言葉選びや音楽的で人の共感を得られる文章を書くには、多くの経験が必要となります。しかし、最初は難しいことは考えず、素直に自分の思ったことを自由に歌詞にしていきましょう。

とはいえ、特定の個人への攻撃的な言葉や差別用語など、聞いて気持ちが悪くなる内容や単語は避けましょう。

まずは、「どんな内容にするのか」という大きな枠から考えてみるのが第一歩です。思ったことや感じたこと、言いたいこと…。この楽曲で誰に何を伝えたいのかがはっきりしているとまとまりやすくなります。下の表のように項目別に考えてみると整理がつかれます。他にも、季節や物語の中心になる場所なども明確にしておくの良い

でしょう。

テーマを活かす演出を考えよう

歌詞を書くためには、シチュエーションを考えていくことが近道です。家の中で、学校で、街の中で、昼間に、夕方に、夜中に、誰が、誰と、何を、どうして…と、いわゆる「5W1H」を設定してみましょう。

また、言いたいことをストレートに表現するのか、何かに例えたりして間接的に匂わすのか…も大事な演出方法の1つです。直接的な表現はメッセージ性が強くなりますが、脚色されていない分すべてがそのまま伝わり、

書き方によっては共感性の少ない単なる個人の主張に終わってしまう場合もあります。

逆に、一見何でもないことに裏の意味を持たせたりダブルミーニングにしたりと、何かに置き換えて表現すると歌詞に深みが出ます。思い切った感情でもオブラートに包んで伝えることができますが、複雑すぎると伝わりにくかったりするので、少し高度な書き方だともいえます。



▲等身大の日常生活の中から題材を決めていくことから始めてみよう

テーマの選択肢の例

フィクション or ノン・フィクション	「フィクション」とは、事実ではない創作された話のことです。恋愛、友情などから、妄想、理想、SF 的な空想に至るまで、物語のネタは無限大です。対して、実体験や本当にあったことをもとにした話を「ノンフィクション」といいます。日常の出来事だけではなく、ニュースになった事件や聞きししたことを題材にしても良いでしょう。もちろん、まったくの事実だけではなく、少し脚色しても構いません。
主人公は自分 or 自分以外	主人公が自分の場合、言いたいことは書きやすくメッセージもリアリティが出ます。しかし、自分は語り部となって他人の物語を紡いでみたり、自分を他人や動植物、無機物、過去や未来の自分、異性、架空の人物などに置き換えた歌詞も、リアルではない分自由度と深みが増します。
舞台は現在 or 過去、未来	現在の状況や気持ちを大事にして「今」「この一瞬」にスポットを当てたり、未来のために今何をするのか…といった歌詞は親近感があります。しかし、子供の頃の思い出、あの夏の出来事、人との出会いから別れ、数年後の未来予想図などは共感性が高くなります。
ポジティブ or ネガティブ	未来志向で前向きな感情は、アップテンポの元気な楽曲に似合います。ライブでも盛り上がるでしょう。一方、悲しく切ない感情をテーマにした歌詞も共感を得やすい題材です。辛いことがあったけど負けないぞ、悲しさを乗り越えて…などのステップを作るとドラマ性が生まれます。
自分に向かって or 誰かに対して	自分に向かって「負けるな」「頑張れ」とメッセージを送ったり、自分を客観的に見た視点からの気持ちを綴っても良いでしょう。また、好きな人や友達、仲間、家族、ペットといった身近なものから、自然や大事にしているもの、社会に向けてなど、作詞の対象は様々です。

「構成」を考えよう

テーマが決まって大枠の内容ができたら、それを「どう聴かせるか」の構成を考えましょう。映画や芝居の脚本と同様に、大きなテーマをわかりやすく伝えるためには、ただ単に言いたいことを連ねるのではなく「歌詞」として成立させる構成であることが大事です。その作業をすることによって、楽曲自体のアレンジや曲調が決まっていくこともあります。



ロックの楽曲の構成

ポピュラーミュージックと呼ばれるロックやジャズは、わずか数分の間に様々なドラマが展開するようにできています。

ロック／ポップスの場合、文節やコード進行のまとまりをAメロやBメロと

いった「セクション」に分けて考えます。歌詞を中心に考えると、多くの楽曲は「Aメロ」→「Bメロ」→「Cメロ（サビ）」と話が続き、それを「1コーラス」としています。楽曲は、その1コーラスを繰り返したり膨らませていくといった流れでできています。構成には様々なパターンがあり、歌詞の流れやドラマの作り方、アレンジの方向性によっ

て変わります。

また、ギターやキーボードなどのソロの前後に「大サビ」と呼ばれる「Dメロ」を作って、物語をさらにドラマチックに盛り上げる場合もあります。

歌詞やメロディ、コード進行などを考える時には、こういった構成を考えたが全体像をイメージして作ることが大事です。一遍の短い物語を編むように、楽曲のテーマや言いたいことに向かってどう話を進めていったら良いのかなど、常に俯瞰で全体を見ながら進めていきましょう。

物語の流れを考える

物語を作る時の基準の1つに「起承転結」があります。話の始まりである「起」から、それを引き継ぐ「承」、物事が一変する「転」、そしてそれらが解決する「結」という流れが大事だということです。もちろん、必ずこうしななければいけないというわけではなく、



▲物語の作り方や言葉の選び方などを、読書や映画鑑賞で身につけよう

いきなり結（サビ）から始まる楽曲も大きなインパクトがあります。聴く人の気持ちになって考えていくことが大事です。

例えば、片想いをテーマにしたとすると、「好き」や「さよなら」という気持ちをサビで言うために、どう A メロや B メロの歌詞を持っていけば良いのかを考えていきます。基本的には、歌

い出しである 1 コーラス目の A メロは状況説明や登場人物紹介など行い、聴いている人をその世界に引き込みます。対して B メロは、サビへの橋渡しとして A メロとは違ったアプローチが効果的です。A メロがネガティブな内容ならポジティブに、元気な感じなら少し寂しく…と、逆の感情を持ってきてても良いでしょう。そして、サビにキャッ

チーな言葉を持ってくれば、単なる「好き」という感情にも深みが出てきます。

一般的に、2 コーラス目は 1 コーラス目とは違った角度からの書き方にすることがセオリーですが、もちろん、それがすべてではありません。ショートムービーの脚本を書くようなつもりで物語を作っていきましょう。

セクションの内容の例

A メロ	基本的に物語のスタートである「起」となるセクション。あまり感情を出さずに状況説明をするのが常道です。1 コーラス目が「現在」の話なら 2 コーラス目は過去に戻ったり…と、視点を変えると効果的。
B メロ	A メロとサビの橋渡しの役目を持つセクション。A メロを引き継いだ内容だったり、A メロと逆説的な内容で膨らませることによってサビが活きてきます。2 コーラス目でも同じ手法をすると安定感が出ます。
C メロ（サビ）	楽曲の核となる部分。通常、すべてのセクションはサビのために用意された布石です。最も言いたいメッセージがリフレインされるので、直球、変化球、様々な手法で耳に残る印象的な言葉を探しましょう。
D メロ	2 コーラス目の後や楽器ソロの後などに出てくる、今までとは違った世界観を持ったセクション。「大サビ」とも呼ばれる。楽曲に膨らみを持たせる演出として重要なセクションですが、なくても問題なし。

歌詞も「音楽の一部」と捉えよう

歌詞が詩や日記、ブログと違うことの最も大きな点は、必ずメロディ（音程やリズム）がつくことです。言葉にも当然ながら「音」があり、単語や文章はアクセントやイントネーションによって感情の伝わり方が変わります。そう考えると、歌詞も「音楽」の一部であるとイメージできると思います。言葉としての音色（ねいろ）や響きに注意を払うことも大切です。



「音」を考えた言葉選び

歌詞は歌い方や声質によって音色（ねいろ）や響きが変わります。しかし、多くはその前に言葉そのものが持つ音色も考慮して作られています。最もわかりやすい例が「母音」です。日本語は母音が強い言語なので、母音を考えて歌詞作りがされていると「言葉の音」が活きてきます。例えば、メロディの最後がロングトーンで伸ばす…といったものであった場合、「♪私に一」と母音が「い」だと口が広がらず発声も難しくなります。しかし、「♪私は一」と母音が「あ」であれば、口を大きく開けて響かせることができます。余談ですが、ラップでよく見られる「韻を踏む」という歌詞の作り方は、母音の言語である日本語にとっても非常に重要なポイントです。

さらに、「母音／子音」の他にも、「濁音／鼻濁音」「破裂音」「促音（小さい

つ）」「拗音（小さい”や”、”ゆ”、”よ”など）」といった言葉を音として捉えることも大切です。ちなみに、歌詞をより正確に伝えるためには、そういった「言葉の音」にこだわって歌う方がベストです。いわゆる「滑舌の良さ」とは、それらを重要視することでもあります。

「一音一語」な日本語

英語の「I love You」は3音ですが、日本語の「あいしてる」は5音です。もちろん、中には「アラビュ」と1音、「あい してる」と2音で歌ってしまうメロディも数多くありますが、気をつけないと言葉が聞き取りにくくなる危険性があります。ミュージックビデオのように



▲言葉が持つ音色（ねいろ）も立派な音楽の一部です

歌詞が文字で見られるのであれば別ですが、軽音楽部の場合はライブで歌うことが基本なので、歌でしっかりと歌詞が伝わる必要があります。歌い方やメロディの作り方に関わりますが、日本語の響きも意識しましょう。

アクセントやブレスの位置

作詞で主に使われる標準語には、あまりアクセントやイントネーションが

ありません。しかし、歌詞には音程がつくため言葉のアクセントの位置は大事なポイントとなります。

例えば、「わたしは」という4文字をアクセントを変えて読んでみると、「た」と「し」は言葉として違和感があると思います。こういった部分が高い音程だったり小節の1拍目になっていると、言葉が伝わりにくくなる可能性があります。

また、歌う時の「ブレス（息継ぎ）」

が単語の途中に入ると意味が分かりにくくなる場合があります。「わたし（V）は」であれば自然ですが、「わた（V）しは」だと少し不自然に聞こえます。しかし、これらはメロディのリズムを優先したり、注目させる狙いを持って作られる場合もあります。他にもシンコペーション、ロングトーン、音程の変化、スタッカートやテヌート…など、メロディと歌詞の関係を大事にしながら作詞しましょう。

言葉とメロディと拍の関係

①  わ た し はー	メロディが1拍目のアタマから始まり、歌詞も同様に小節の最初から始まるパターン。伴奏も含めすべてが同時に始まるのでインパクトが大きい。激しい楽曲のサビに合います。
②  わ た し はー	本来アクセントがない部分を小節の1拍目にするパターン。歌詞の伝わりやすさよりも、弱起（アウフタクト）なメロディのリズムを重視したケースによく使われます。
③  わ た し はー	メロディ的には弱起でも単語の切れ目が小節の始まりと合っているパターン。リズムカルさを活かしながら歌詞も伝わりやすい。後から合わせるのは難しいかもしれません。

「伝える」作詞を考えよう

部活動である軽音楽部という場では、単に思ったことや言いたいことを歌詞にしていけるだけではなく、表現の1つとして言葉の選び方や紡ぎ方を考えていくことも大切です。しかし、文字数やセクションの流れといった制限がある中で伝わりやすい言葉選びをすることは簡単ではありません。少し「日本語」としての側面から考えてみましょう。



言葉選び

日本語は、世界的にみても難しい言語だといわれています。ひらがな、カタカナ、漢字、英語を使い分け、名詞、動詞、形容詞も様々な言い方があります。例えば、一人称でも「私」「僕」「俺」「自分」「あたし」「オイラ」「我」「オラ」「アタイ」「わし」…などと選択肢も多く、言葉選びが歌詞の世界観に大きな影響を与えます。

作詞のコツ

- 1) 視覚的な言葉を散りばめる
- 2) ベタな言葉避ける
- 3) 単語の意味の広がりで行間を膨らませる
- 4) 漢語を避け、言葉で遊ぶ
- 5) 等身大の「あるある」を歌う

▲資料提供：
中央大学杉並高等学校 音楽部顧問 大館瑞城先生

一方、大阪、沖縄、東北といった方言が歌詞になった楽曲が多かったり、作詞は国語の勉強になりつつ、コミュニケーション能力や伝達力の向上にもつながりそうです。では、歌詞にどんな「言葉」を使えば良いのでしょうか。中央大学杉並高等学校の国語教師であり、音楽部顧問を20年近くに渡り務められている、大館瑞城先生の力をお借りして考えてみましょう。

作詞のコツ

大館先生によると、高校軽音楽部の世界では伝わりやすい言葉選びは重要なポイントだということです。音源制作をしている学校は別ですが、軽音楽部の作品は発表会や演奏会、大会などの「ライブ」で披露することが前提

です。既存曲のように何度も繰り返し聴いてもらえたり、歌詞を読み込んでもらえたりすることはほとんどありません。すなわち、歌詞は文章でありながら「耳から入る一期一会」なもので、深みのある言葉や難解な言い回しは効果が薄くなる可能性があります。

また、抽象的な言葉を使うと言いたいことが伝わりにくくなるともいえます。抽象的な言葉は直接的ではないため一見カッコ良く見えますが、結局何が言いたいのかとなってしまうことの方が多いため確かです。しかし、その「思い」にいたった背景をプラスすることで、より多くの共感が得られるような歌詞になると、大館先生は解説します。

「部活動」での歌詞作り

大館先生の「作詞のコツ」を要約すると、まず言葉選びとして「視覚的な表現」を使うと効果があるということ

です。例えば「泣く」という言葉を視覚的に「涙をこぼす」「目に光るものが…」などと言い換えることで、映像がイメージできて感情が入り込みやすくなります。

また、自動化した言葉（ベタな言葉）は心に刺さらず、言葉を「異化」することで引っかかるようになるとのこと。異化とは、見慣れたものを「見たことがない変なもの」にする手法で、例えば「少女が微笑む」はベタですが、「扇風機が微笑む」はだいぶ異化され、暖かい風が吹いてきそうです。しかし、

「きしむ床板が微笑む」は行き過ぎかもしれません。ちょうど良いラインを見つけることが大切です。

さらには、ストレートな表現よりも単語の意味の広がり「行間」を膨らませることにつながります。荒井（松任谷）由実の名曲「ルージュの伝言」では、歌詞にバスルームのどこに何が書かれていたのかは明らかにされていませんが、その場面前後の様々なことを想像させられます。

他に、同音異義語が多い漢語は避ける、言葉が持つ「音」やリズムで「遊ぶ」、

等身大の「あるある」を、しかも「言われてみればあるある」を狙う…といった手法もテクニックの1つです。普段から歌詞だということを考えずに、日常で出会う「あるある」をはじめ、言葉を山ほど書き連ねてストックしておき、その中から絞り込むようにすることが良い方法です。最終的にメロディに対して言葉の収まりが悪い場合もあるので、そんな時は言葉を置き換えて、耳馴染みの良いものにしていくという流れが有効な歌詞作りのコツです。



▲作詞は「言葉を編んでいく」こと。日頃から言葉のストックをしておこう

印象的な歌詞の参考曲

日本のロック／ポップスの楽曲では、どんなステキな歌詞たちが人々の心の琴線を揺らしてきたのでしょうか。ぜひ楽曲を聴きながら作詞者の思いやボーカリストの感情、演奏やアレンジなども一緒に研究してみてください。



BUMP OF CHIKEN「天体観測」

作詞：藤原基央



うまくいかなかった恋を天体観測の思い出にオーバーラップさせて綴る。今天体観測をしているように始まり、歌詞が進むにつれてそれが過去のことだとわかる。もう一度キミに会おうとして望遠鏡を担ぐラストが印象的。

NUMBER GIRL「透明少女」 作詞：MUKAI SHUTOKU



「気づいたら俺はなんとなく夏だった」「狂った街がどきどき」といった表現が魅力。夏の到来への一瞬の感情を女性の服装や街のキラメキで例えるなど、文学的な表現で日常の1ページが歌詞として昇華している。

太田裕美「木綿のハンカチーフ」

作詞：松本 隆



上京していった彼と地元に残った彼女の想いを、Aメロは彼の移り変わってゆく気持ち、サビはそれに対する彼女の気持ちが語られる。最後にだけ登場するタイトルの「木綿のハンカチーフ」に涙が止まらない。

西野カナ「トリセツ」

作詞：Kana Nishino



自分と付き合うならココに注意してねという初々しい女子の気持ちを「取り扱い説明書」に置き換えて表現。女子も男子も共感する歌詞は西野カナの最も得意とする分野だが、ほとんどが実体験ではなくフィクションだそう。

吉田拓郎「唇をかみしめて」

作詞：吉田拓郎



吉田拓郎本人の出身地である広島弁で歌われ、本音で語られているような親近感があり、心の内に秘めた強さと優しさが胸にしみる。映画主題歌の書き下ろしなだけに、不器用な主人公の気持ちが絶妙に反映されていて感動を呼ぶ。

グレープ「フレディもしくは三教街」

作詞：さだまさし



祖母から聞いた少女時代の中華民国・漢口（ハンカオ）での淡い初恋を描く。祖母の回想という形で進む物語は一編の映画のように異国情緒とともに綴られてゆく。極上のラブソングでありながら異色の反戦歌でもある。

植村花菜「トイレの神様」

作詞：植村花菜・山田ひろし



おばあちゃんの思い出が、あるある話やおばあちゃんの知恵袋的なエピソードを交えながら進んでいく。優しく語るような A メロと、「あ」の母音を最大限に生かしたサビの対比に込み上げる感情が抑えられない。

松たか子「Let It Go ～ありのままで～」

日本語詞：高橋知伽江



映画「アナと雪の女王」の挿入歌で、英語詞の原曲に日本語詞をつけたもの。英語発音をしているキャラクターの口の動きにうまく同期させていて違和感がない。歌詞の内容は超訳気味だが日本人の心に響く言葉が続く。

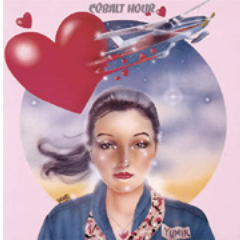
スキマスイッチ「奏」

作詞：大橋卓弥



別れのシーンが揺れ動く感情とともに描かれる。冒頭の「♪改札の前つなぐ手と手」で世界に引き込まれ、歌詞が進むにつれて徐々に情景がイメージされてゆく。男女だけではなく、親子、親友の旅立ちにも聴こえる秀作。

荒井由実「ルージュの伝言」 作詞：荒井（松任谷）由実



軽快なリズムとキャッチーなメロディに乗せて「今」の私の気持ちが語られる。具体的なことは何も歌詞には現れないが、現在と（ほんの数時間前の）過去が目に見え、ママや My Daring などの単語も曲調に合っている。

SAKANAMON「鬼」

作詞：藤森元生



まさに「言葉で遊ぶ」とはこのこと。一聴すると単なる言葉遊びに聴こえるが、言葉の音色（ねいろ）が軸にある歌詞はとても音楽的。高度な演奏のアレンジやプレイも相まって必ずもう一度聴きたくなる中毒度は鬼レベル。

打首獄門同好会「猫の惑星」

作詞：大澤敦史



猫愛がデスメタルな演奏とともに語り尽くされる。そのギャップもさることながら言葉のハマリ具合は完璧でしっかりと耳に届く。サビの「♪猫が住む星に僕は生きている」という逆転の視点フレーズに共感してしまう。